

田村 明 ・ 旅 (2)

田村千尋

自由な選択

戦争が終わり、爆弾や焼夷弾による死の恐怖から解放された。勤労働員も解除され、再び静高での学びと寮生活が始まる。集まった面々それぞれが思いのたけをぶちまけた。拘束と強制の世界とは隔絶した新鮮な空間があった。わずか一年という短い時間ではあったが、自由とはかくも自由であったかを知った。明は何か惹かれるように自己を表現出来る演劇の世界に没頭し、楽しかった事を父母、兄弟に語る。19歳、青春の最後に間に合った。

そして大学を受験する時が来た。自分の人生の方向を決める時でもある。思えば旧制高校受験では兵役を避ける為に自分の道を探したが、これからは自分がやりたい仕事から選ぶ事ができる。そして同時にそれは「結果の責任は自分にある」という意味でもある。明はこの時点で自分の進みたい道が見えていたわけではない。わたしが見ていた彼の心を探りながらこの後、彼の気持ちになって書いてみよう。「まず大学だが東京大学にいけそうな点は取っている。次は理工系の道は自分の心から離れてない、後は消去法で考えればよいだろう。理学部は一つの道を究める、あるいは自然そのものを考究するタイプの人が行く所だが自分はそうではない。従って選択肢の第一は工学部である。その科目は機械、電気、工業化学、土木、そして建築がある。中学3年の時、数学に開眼し、問題を解くと言う能力は獲得した。だが、物事を数学的に考える力が出来ただけだ。機械や電気と言った方程式の上になり立つ実学はあまりにもキッチリし過ぎてそんなに好きではない。それは中学の頃、好きであり、得意でもあった歴史、地理などの社会科的な視点がない。化学は嫌いではなかったが、やはり歴史的、地理的な空間がせまい。土木と言うとどうしても現場の体力や腕力が必要な感じがするが到底自信はない。残る建築には多くの境界領域的な世界が有りそうだ。人と人の接点と接触頻度の違いを最も感じられ、それが仕事そのもの



の様だ。ここしかない、自分に相応しい唯一無二のフィールドだ、それに父方の祖父は宮大工、つまり建築だ」この考えを父母に話し大賛成を得た。目的の学部学科に一步を踏み出した。

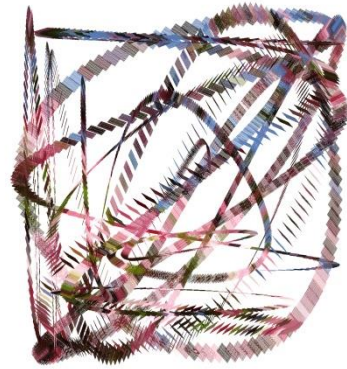
左から、忠幸、義也、明、千尋、1953年前後、明は運輸省と学生の掛け持ちをしていた頃と思われる。千尋はまだ学生、何の集会だったかは記録がないが、この頃、食事はやっと豊かになる。母は草月流の師範として生徒も30人以上、父はナショナル金銭登録機(NCR)の販売部長、教育部長などを兼務して生活にも余裕がやっと出て来た時だった。カメラ好きの父が当時、有名になったニコンを購入、まだモノクロの時代だった。

東京大学工学部建築学科、在籍中の変貌

明は前編で中学三年のときに数学に目覚めて試験が楽しいものになり、他の勉強も余裕が出来たことを記した。大学3年間では彼の感性や情緒、そして鳥瞰的な視点の三つに注目すべき事柄が起きた事をお話したい。それらは、「楽譜の読符力」、「絵ごろの開眼」、「広い製図台の活用」である。製図台は直接、製図をする話ではないから全て直接、学業に拘わることはない。それらが起きたきっかけは解らない。多感な青春時代のことだから、それこそ恋のしわざかもしれないし、何かの出会いによるのであろう。記憶にある周辺の出来事を入れ考察、推測してみよう。

1) 音符の読譜力： 戦時中、国家体制は「音楽が軟弱な精神を造る」として隅に追いやり、とりわけ優しく優美な洋楽が排除された。当時の雑誌、「音楽の友」*に見られる内容

*いまは現実に国民の士気を昂揚し、国民思想を堅実にし、または国策を宣伝するような音楽が出ていて、そうしたものが退廃的流行歌や米英型享楽音楽を駆逐しつつ全国民に浸透しているのだ。楽器の製造販売禁止は、国家にとって有用な音楽の大部分が国民から遮蔽されることを認めて欲しい。また、音楽家が自分で使う楽器は修理を加えればあるいは使えるかもしれないが、音楽を通じての厚生運動とか国策普及運動という新しい分野に対しては楽器の新調が必要である。
『音楽之友』 第2巻第9号 1942年 09月
p.14-17



は楽器を供給してほしいという訴えであるが、音楽は進軍ラッパしかなかったことが読み取れる。この頃、ラジオは唯一の宣伝媒体で国の統治機関の道具として使われ、音楽を鑑賞するなどという働きは殆ど全く無かった。ラジオそのものの存在、遠いところの人の話が空気中を伝わって聞けると言うことの不可思議さに驚いていた時代である。中学生達は軍歌「万葉(ばんや)の桜か花の色」を競歩訓練の時と歌わさせられた。およそクラシック音楽的な雰囲気から一番遠い所にいた。音楽の心を奪った日本の戦時体制はこの年代の若者たちの青春時代を徹底的に打ち砕いていた。

そんな社会状況のなかではあったが小さいときから我が家では母の指導のもと賛美歌を歌ってきた。日曜日の夜の集会には聖書を読み、お祈りをし、数曲の賛美歌を歌った。母の発声は気持ちの良いメゾソプラノ、本格的なベルカントだったからひととき目立つ声、父を含め5人の男性(初めの頃は男の子)に囲まれ、その中心に居る、という雰囲気だった。戦前、我が家ではメロディーをユニゾーンで歌っていた。賛美歌は一度聞くと大抵、覚えられるが始めて聞く曲の時は一生懸命、音符を探りながら歌ったものだ。明は少なくとも大学にはいるまでは歌で目立つ存在ではなかった。著書、**東京っ子の原風景**中には次の文がある。「東京大学に入学、建築学科の建物に入ると、突然、三、四人の学生がドイツ



櫟の歌

田村 明

夏は緑の大腕をいっぱい伸ばし、
風が吹くと囁いたり、ざわめいたり、ときに歌を歌った
秋には茶色や黄金色の落ち葉を一杯に撒き散らす
櫟の大木であった

櫟の大木を仰ぐ土地に、男は赤い瓦屋根の家を建てた
小さな庭には柿の木を植え、秋には赤い実をたわわにつける
快活な妻と四人の男の子、それに家を守る男の姪の
七人の住まいだった
「我等は七人」男は英語の詩を読む

(男は父、幸太郎)

前章 p.11にあるベランダの風景をそのまま表現したような詩である。父は出生以来、青年期まで継父母に育てられた。その継父母が離婚し家を追われた。良き妻に巡り会え、共に苦勞してここまで来た。父親像は切なく懐かしい。櫟は巨木になる。春夏秋冬の季節に合わせて生きている。確かに田村家を守るように葉を増やし、時に試練となるように裸で寒冷の風を送った。長兄の忠幸は「櫟の下」という田村家からの家庭報を作り、いとこの兵頭謙三とニュース交換をしていた。その元になったのは次兄、義也による家庭新聞発行に刺激されて始まったものだ。この交換レターは戦前、数年間続いた。忠幸兄は長男らしく、両親に対し、極めて実直だった。千尋の生活環境では生涯の半分は櫟の下にあった。この写真は庭先にある公園にある櫟の木、10本近くある。

語で「分かれの歌」を素晴らしい男性合唱でハモッている。旧制高校とは違う知的な雰囲気だ、、、」の一文がある。きっと、これを聴いた時、明の心に大きな飛翔感を感じたのだろう。音符を読むようになりたいと考えたきっかけだったのではなかろうか。まだ、ダークダックスも結成されていなかった。その数年後、大学3年の頃だったと思うが、家の集会の時、突然、テノールパートを歌い出し、周囲に大きなインパクトを与えたのである。何処で練習したのだろうか、知らない間にコールユーブンゲン（音階練習曲集）が明の机においてあるのに気づいたのは後のことだった。確かではないがコーラスをやったという話を聞いたこともあるが残された彼の書籍類のなかにそれらしい楽譜がないのは腑に落ちない。そんな次第で、私もベースパートが歌えるようになりたいと練習を始めた。こうして我が家では、音の広がりのある賛美歌が歌われるようになった。因みに、明の妻、眞生子は大のクラシックファンで眞生子自身はアルトを歌い、家庭集会での賛美歌は何時も心地よい4部合唱の幅のある音が響くようになった。

2) 製図板の活用法と絵ごろの開花： 工学部にはいると製図という授業がある。最近ではコンピュータを駆使する世界のようなのだが、当時は必須科目で広い全紙大の製図板にトレーシングペーパーを張って作図したものである。明がこれを買ってもらった時はとても嬉しそうだった。彼の部屋は6畳間だったが、既に本棚で周辺が埋められ、実質、4畳半、それにベッドと自分の机、となると歩くところが少し見えるだけだった。自分の小さな机の上に製図板を置くと、かなり机からはみ出てベッドの上まで被さった状態だった。所が椅子に座ってみるとその作業空間は今まで感じたことのない広さがあり、この感覚は明の物事の認識感覚、意識体系に大きな影響をもたらしたのではないだろうか。(実はこの感覚は私が座って感じたことである。世界が広がり、漠然とした未来感が膨らむ思いだった。) 製図板だから製図をするのに必要な作業空間を確保するため作業台をイーゼルのような台に

のせ、立てて使うことが多い。しかし、彼はこの作業台に角度をつけて作業した姿は見たことがない。最も彼がこの製図板を使って鳥口に墨を入れ、本格的な図面を書いていた姿を見たのはほんの数枚である。殆ど製図板を広い作業空間として使っていた。後に横浜市に入ってから「大テーブル主義」と称する会議形式を打ち出したが、私はその原型がここにあったのではないか、と思う。場としての大テーブルは大きな議題（テーマ）の象徴的な意味であり、その前では全員が平等な立場で発言出来る、という心理状態を醸造させ、参加者はそれぞれの立場で会議の中身に参加し、考え方を提案し、批判しあえる。そこでは実務的に互いに平等であるという感覚が生まれる。明はこれに「協働と実践」という語で説明している。この仕事は全員の共同作業であり、それぞれの専門性が最大限に活かされる、という意識改革を目指したのであろう。ひるがえって明が新しい横浜市の新しい職場に赴任したとき、まだ権限も定かでないとなれば、これは最も有効な手法だったのではないか、それを **one phrase** で表現したのが面白い。

写真は元々、一点から見ているのでこの鳥瞰的な感覚であり、それは物事を立体的に捉えて頭にしまい込むには極めて有効な手法であるように思う。遠近法は画法の大切な表現法だが、建築の設計図のなかでも人間の視覚に訴える重要な表現法であろう。そして、学問的に学んだことで明の絵を描く心に火がついた。本格的な油絵は若い学生時代に数枚、描いて手が止まった。しかし、沢山の旅行に行き手早くスケッチをして心に納めた。スケッチブックは優に 100 冊を超える。ともかく建築学科に行ってから潜在的に持っていたのだろうが能力の開花は目を見張る。決して初めから直感的に行動できたのではない。脳の仕組みは良く分からないが大量の一見無関係なものが沢山記憶され、ある時、何かの力が働き、一つの統一機能が働き、関係性が纏められ、全体が一挙に立体的に浮き上がり、自分のものになる、と言った仕組みなのではないかと思う。少し横道にそれた。

3) 物事を見る角度

この製図板で私は二つの写真に認識機能に相似性を感じる。一つは東京大空襲後や広島原子爆弾後の航空写真、もう一つは明自身が人生後半に世界 133 カ国を訪れて撮った沢山の幾何学模様の歩道写真である。いずれも透視投影図法で下向きに 30 度強、少し下向きで人がものを考える時、本を読むときの姿だ。大空襲後の焼け野原は今でも目に焼き付いた景色だが明は最も多感で分析力のつき始めた 19,20 歳、当然、目に入る景色に無情さや強い喪失感にさいなまれていただろう。明が建築学を志した動機は父方の祖父が宮大工だったこともあるだろうが、この景色は大きな要因の一つだと思う。幸運なことに樗のある柿の木坂の我家は安住の居場所が確保されていた。しかし、「まち」には焼けたトタンで雨風をしのぎ、地を掘って寝ぐらを得ていた沢山の人がいた。焼け野原になった東京に再生のエネルギーを感じた人はいただろうか。



世界第二次大戦で敗れ、完膚無きまでに焼き払われ、焦土と化した。東京は隅田川周辺の航空写真、あのときの焼け跡の記憶は、焼け跡の臭気を含めて決して忘れられない。焼け跡にはもう何も残されていない。明が建築学科に入った 1947 年にこの種の写真はまだ公開されていなかったように思う。従ってこの種の写真は見ていなかっただろう。むしろ、襲ってくる空腹の毎日は次第に餓鬼の様相を呈した。明は旧制静高から 50km ほど反対方向の磐田に戻ると薩摩芋の島があると聞き、わざわざ戻って買い出しに行き、家族のために 30kg も背負って東京に帰ってきた事がある。久しぶりに美味しい金時芋をお腹一杯食べて満足した。その後、明と二人でトランプだったけ、囲碁だったか忘れたが二人で遊んでいたら明が痔で鮮血が畳を染めてあわてた。持病でもあったが重いものを持って来たのが原因でそんな事態になった。なんだかすこく申し訳ないような気もあり、美味しかったお芋の味が一際記憶に残った話である。

チェコのプラハ歩道に描かれた割栗石の模様に触発され、横浜市の道路埋め込み型の道先案内を思いついたという。横浜の道先案内、今はあまり目を向けられていないのは残念だが歩くという動作の中で人が見る方向は水平方向、限りなく 0 度に近い、あまり評価されていない理由はそこにあっただかもしれない。



チェコのプラハを訪れた明は割栗石を面白い模様でデザインした歩道を見てヒントを得た。横浜の道路に道先案内表示板の代わりに歩道にタイルを貼って案内をする、あのアイデアである。勿論、人がしょっちゅう踏み歩くので削られても耐えられるようなタイルでなければならぬ。技術的な問題として厚みのある色模様のあるタイル製造に専門家の知恵を借り完成した。
人は高いところに上りたがる。見下ろしたいという気持ちは木の上で生活した時代からの DNA か、木の上は食料があり、危険を察知できる安全がある。そして景色としても程よい広がりがある。がものを見るとき、様々な角度がある。景色を見るときと絵画を見るときでは異なるだろう。まして、文章を読むときと方程式を見るときでは異なる。凝視するなかにも、眺めるとき、考えるとき、

明は鉄道が好きだった。編み目のように広がる「時刻表」の路線図をあかずに見ていた。学生時代、まだ旅行など受け入れの宿もない戦後のあの時代、縁者をたよって旅にでた。建築学科を卒業して運輸(現、国土交通)省に勤めたのも一つの流れだろう。運輸省の後に運輸次官になった山内公猷人事課長に面接をうけ「観光都市計画」をやる、と言ったという。「そんなの無い」といわれ「自分が作るのだ」と切り返したというからずいぶん時代を先行していたと思う。そしてこの建築学科で出会った大学院特別研究生(今の大学院生とは異なる)の浅田孝との出会いは明にとって最も大きな財産になった。浅田は建築学科を出て軍人になり、現場を指揮した。敗戦で大学に戻りこの特別研究生になったという。極めて抽象的な概念を操り、学生達を煙に巻きながら暗示的な未来像を表現していたという。